

## 武蔵野南沢の自然誌 (II) —染料植物・薬用植物栽培と戦後の自然誌報告—

大塚ちか子<sup>1,2,3</sup>, 下野明子<sup>2,4</sup>

松田こずえ<sup>4</sup>

(<sup>1</sup>自由学園最高学部, <sup>2</sup>自由学園環境文化創造センター,  
<sup>3</sup>自由学園リビングアカデミー, <sup>4</sup>元自由学園最高学部)

原稿受付 2020年11月3日; 原稿受理 2021年1月31日

### Natural History at Musashino Minamisawa (II): Documents on Herbs and Dye Plants Cultivation in Jiyugakuen and Reports of Natural History after World War II

Chikako OHTSUKA<sup>1,2,3</sup>, Akiko SHIMONO<sup>2,4</sup> and Kozue MATSUDA<sup>4</sup>

<sup>1</sup> Jiyu Gakuen College, <sup>2</sup> Jiyu Gakuen Environmental Culture Co-creation Center

<sup>3</sup> Jiyu Gakuen Living Academy, <sup>4</sup> former Jiyu Gakuen College

武蔵野南沢の自然誌(I)に記した自由学園女子部18回生による『南澤花鳥暦』(1940年完成)とほぼ同時期から男子部2回生によって行われた武蔵野百花園と、その後の染料植物・薬用植物の栽培について、当時の『学園新聞』(自由学園出版局発行)の戦時下(1939~1941)の記事から紹介する。武蔵野の美しい植物を残そうという努力であったと言えるが、次第に空き地農業による食料増産に移っていく。自然誌の学びが伺える。

なお、この武蔵野南沢の自然誌について、さらに南沢キャンパス移転後の自由学園の自然誌資料を紐解くことになり、連載として報告を重ねることになった。そのため、現在および今後の武蔵野地域の自然誌研究に資することを願って、戦後の自由学園の自然誌報告から紹介した。

**Key words:** 自然誌、武蔵野、南沢、自由学園、百花園、染料植物、薬用植物、自然誌報告、湧水河川

#### 1. 自由学園南沢キャンパスにおける武蔵野百花園、染料植物・薬用植物栽培(1939~1941)

主として自由学園男子部2回生が行った探索と栽培の記録を、『学園新聞』(自由学園出版局発行)に掲載されている1939年~1941年にわたって紹介する。戦争の足音が大きくなる時期にも関わらず、自由学園の生徒は、武蔵野百花園をはじめとして野生植物の調査、採集、栽培を重ねていたことが読みとれる。

『学園新聞』(自由学園出版局発行)掲載記事(号数の後の( )内は、ページ番号)

##### 1) 1939(昭和14)年5月15日発行 第113号(3) 【資料1】

「準繩(はかりなわ)はわがために楽しき地におちたり」南澤の新緑

「武蔵野百花園」および『南澤花鳥暦』当時の自由学園構内のようすを撮影したものである。

##### 2) 1939(昭和14)年8月31日発行 第116号(2) 【資料2】

「男子部生産生活の企画 農業グループの活動」

農業グループの生産活動中に、「武蔵野にある美しい花」が位置付けられているものとして、武蔵野百花園が取り

上げられている。当時は、向島百花園がよく知られた植物園の一つであった。

**3) 1939 (昭和14) 年12月25日発行第120号(1)**

「新しき道は開く—男子部教育報告会とその前後—」で「産業の勃興」の農業グループに「畜産、水産、農芸の三分野は…(中略)…薬草、染料用植物が生え、あらゆる方面に仕事を始めている」と薬草、染料用植物が取上げられている。

**4) 1939 (昭和14) 年12月25日発行第120号(2)**

「東天寮日誌 亡友の記念日」に高等科1年であった男子部1回生が、7月の同級生の一年目の記念日に「朝の散歩の時間に朝露の草原を歩き、皆思い思い美しいと思った花を持って帰った。」大きな白百合を見つけた生徒があり、「南澤に白百合があるとは思わなかった。」とある。花は、庭や野から手に入れ、手向けた時代であった。当時の卒業生によると、身近な装飾、観賞用の花を購入することはなく、自由学園と周辺の野原や雑木林に摘みに行ったという。

**5) 1940 (昭和15) 年4月30日発行 第123号(4) 【資料3】**

化学染料の輸入制限と、染色を行っている工芸研究所への対策として「男子部農業に染料植物グループが作られ、紅花、藍、紫蘇、げんのしょうこ等の苗を植えた」と記されている。なお同ページ最下段に「『南澤花鳥暦』完成—昨年から和田八重造氏の指導の下に、研究に着手された『南澤花鳥暦』は、本年卒業生科学グループの手によって、五月までにはほぼ完成、鳥三十五種、花三百五十種の絵も出来上がった。」との記事が掲載されている。

**6) 1940 (昭和15) 年7月25日発行 第125号(1) 【資料4】**

「天然の七色さがし—植物染料研究—」

植物染料利用のために植物染料栽培グループの植物探索が行われ、東北セツルメント、友の会の協力であかね、くちなし、藍、を得ることができた。「去年の卒業生の数人が植物染料の研究をしていたこともあり」と書かれているのは、『南澤花鳥暦』と並行して行われた卒業勉強を指していると考えられる(注)。

**7) 1940 (昭和15) 年8月31日発行 第126号(4) 【資料5】**

「植物染料研究 「紫の旅」へ薬草二十八本を探す」

武蔵野といえはムラサキと言われるが、自由学園キャンパスの南沢移転以来、ムラサキ生育の記録は少しずつであるが継続的で顕著に減少してきていた(注)。染料研究用に、雑誌『婦人之友』読者の『友の会』東北セツルメントの協力によって採集することができた。

**8) 1941 (昭和16) 年2月28日発行 第131号(1)**

「男子部農業の方向 食糧増産計画進む」

「…(前略) 空地四千坪のうち、今回の目標の食糧増産、薬草栽培、畜産飼料栽培に適した耕地は二千五百坪と算出された。栽培と決定した作物は、…(中略)…薬草は紅花、はっか、糸びす草、はぶ草、たうごま。(前略)…」

**9) 同上第131号(2)**

我等の食糧増産運動の実行組織に、薬草部は、増産計画実行委員会の中で、男子部に位置づけられている。

**10) 同上第131号(3)**

薬草として、「南校舎の裏に廻るとここは全部赤土だが、たうもろこし、その付近にまた南園東園北園と育てて薬草園ができる。薬草もこまごまと種類多く植えず、数種を多量に収穫して、問屋におろすつもりだ。薬草はこの他にも清風寮を利用してげんのしょうこ、どくだみを少しずつうえ広める計画が立っている。」

**11) 1941 (昭和16) 年3月31日発行第132号(1)**

「食糧増産ニュース—芽は萌え出づ—」薬草園での紅花栽培について記されている。

**12) 同上第132号(2) 【資料6】**

「最初の藍に成功」工芸研究所員が、信州の藍作りに教えてもらった様子を報告。

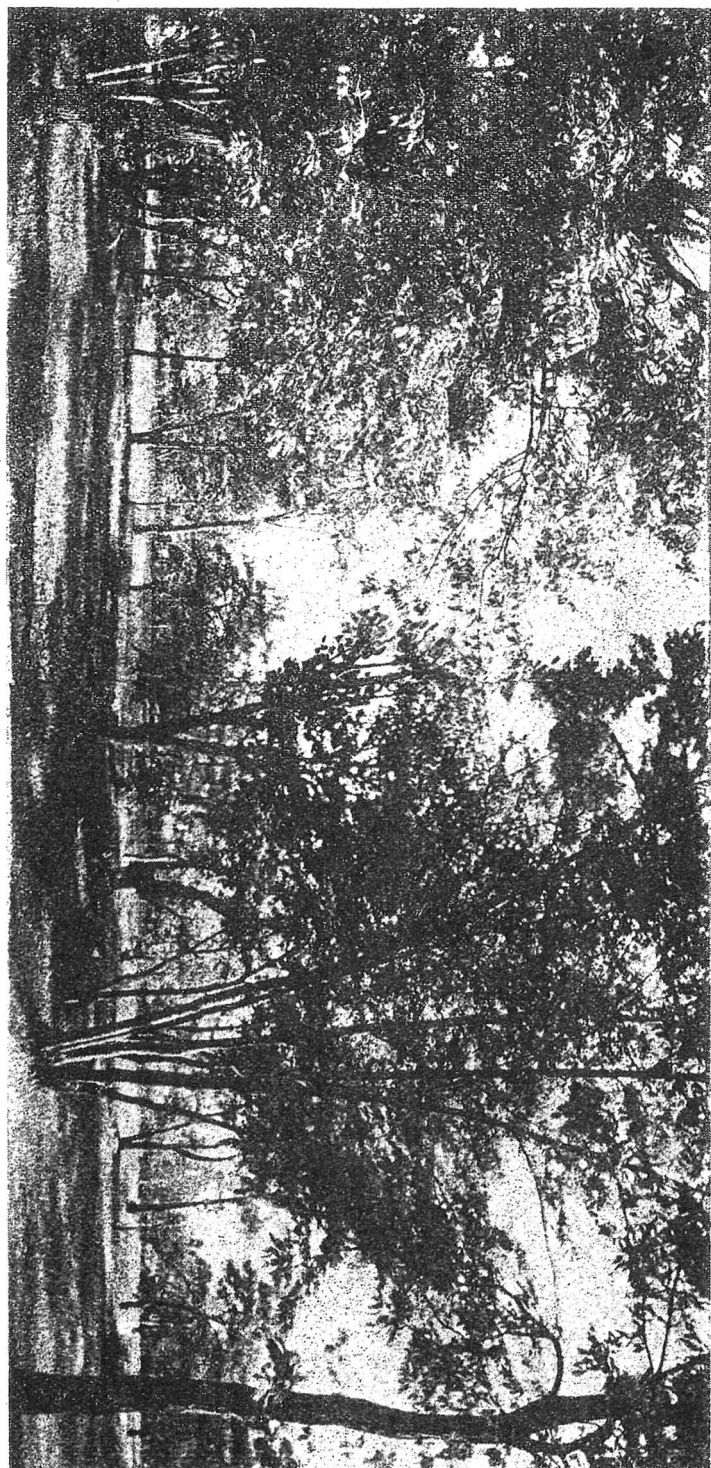
(注):『南澤花鳥暦』については、下記を参照。

大塚ちか子・下野明子・松田こずえ (2020)「武蔵野南沢の自然誌(I)—『南澤花鳥暦』と和田八重造—」生活大学研究5: 124-135.

【資料1】 学園新聞編集部 (1939) 「新緑の南澤」 『学園新聞』 第113号  
昭和14年5月15日 自由学園出版局

(3) 號三十百第 可認物便郵種三第 開 新 園 學 行發回一月毎 行發日五十月五年四十和昭

線新の澤南 “りたちおに地きし樂にめたがわは繩準”



【資料2】 学園新聞編集部 (1939) 「染料植物」『学園新聞』第116号  
昭和14年8月31日 自由学園出版局

號六十百第 可認物便郵種三第 聞 新 園 學

行發回一月毎 行發日一十三月八年四十和昭 (2)

男子部  
生産生活の企劃  
高等科二年木下拾作

**武蔵野百花園** 武蔵野にある、美しい花々を何とかして保存して行きたい、之は南澤の緑の天地に園を企てられた結果が武蔵野百花園になりました、今迄、度々その保存産としてこの百花園に秋多く咲く草花を約三十種集めることができました。  
其等の花を改良して、もつと大きな、綺麗なものをつくりだしたり、又盛に、ふやして野の花の馨が一杯になる様にしたらどんなに良いかと思ひます。

【資料3】 学園新聞編集部 (1940) 「染料植物」『学園新聞』第123号  
昭和15年4月30日 自由学園出版局

號三十二百第 可認物便郵種三第 聞 新 園 學

行發回一月毎 行發日十三月四年五十和昭 (4)

**染料植物** 輸入制限による化学染料の不足に  
よつて染色の低化を憂ひた学園工業研究所では、男子部の産業にこれが対策をはかり、この程、男子部農業の一部に、染料植物栽培のグループをもうけ、早速、紅花、藍、紫蘇、げんおし、ようご等の苗を植えて、今年八月頃には第一回の收穫を得ようとしてゐる。

【資料4】 学園新聞編集部 (1940) 「天然の七色さがし—植物染料研究—」『学園新聞』第125号  
昭和15年7月25日 自由学園出版局

日一月九年六和昭  
可認物便郵種三第

# The Jiyu Gakuen Gazette

回一月毎  
行

(1) 號五廿百第 行發日五十二月七年五十和昭

## 天然の七色さがし 植物染料研究

化学染料の輸入制限は工業研究のプリズムを暗くした。しかし、去年の卒業生の数人が植物染料の研究をしたこともあり、これに對するそなへが全然なかつたのではない。何れ植物から何色が染まるかといふことは、古い文献などで容易にわかるが、いざその植物を手に入れようとすると、なかなかに難かしくつた。工業では男子部の農藝グループ中の高等科一年木下廣雄君がリーダーとする熱心な植物染料栽培グループ、東北セトルメント、各地の友の會リーダーとの連絡で、やうく原色だけを得られた。

「あかねさす」と太陽の枕言葉に使はれるあかねは赤色の色泉である。これは赤まんまに似た草で南澤にもある。くちなしの實は黄の色泉である。藍はその名の如く藍の色泉である。

野川の上流に僅かに残つてゐるにすぎない。この藍については高知の友の會リーダーに依頼したところその地の高等工業学校教師で、藍の研究家の井上氏を紹介され、未知の厚意で、その研究をこの程、工業研究所の本に綴りこの程、工業研究所に届いた。藍も同氏の栽培してをられるのをいつでもわけるとのである。東北地方に生える紅花ももうすでに東北からとよ木下廣雄君はこの栽培に成功してゐる。「むらさき」の色泉、むらさきも「むらさき」の本ゆゑに武蔵野の」と歌に詠れてゐるから南澤あたりにある筈と探したが今日はもう失はれてゐた、所が生保内セトルメントのおばさん達が手をむらさきにしてむらさきをたて、色を染めてゐるといふところから、生保内を去る二里の山中に咲いてゐる。

この機に自由学園の大家族のお蔭で日本全国から、美しい色が工業にあつめられてゐる。工業は又これを持つて日本の空に美しい工業の虹をかゝげなければならぬ。そしてこれは男子部の重要な産業の一つにもなりつゝある。(後略)

### 2. 戦後の自由学園の自然誌報告紹介

戦後の混乱期を乗り越えて、如何に衛生昆虫への関心を深めていったのか。また、衛生昆虫の碩学、佐々学博士を指導者に迎えることが出来たのは、自由学園が創立の精神を戦後も生きていた事を思わせる。

#### a. ハエ目昆虫、ブユ属の駆除について

自由学園を流れる立野川に生息するブユの駆除が、東京大学予防衛生研究所の佐々学博士の指導によって行われた。佐々博士は、ブユの生息環境と生活史の綿密な観察調査を踏まえた駆除を指導された。8年間にわたり研究されたブユは、その後の高度成長期の水質汚染によって見られなくなり、河川の水質改善の研究が行われるようになった。

文献のうち3) 以外は、全てJ-STAGEで公開されている。当時の河川についての貴重な記録でもある。

- 1) 緒方一喜・原田節子・中村光子 (1954) アオキツメトゲブユの分布及び習性について (ブユの資料4) 衛生動

【資料5】 学園新聞編集部 (1940) 「植物染料研究—紫の旅へ—」 『学園新聞』 第126号  
昭和15年8月31日 自由学園出版局

號六十二百第 可認物便郵種三第 開 新 園 學

行發回一月毎 行發日一十三月八年五十和昭 (4)

# 植物染料研究

## 「紫の旅」へ

### 紫草二十八本を探す

紫草の採集は、男子部農藝グループの「紫草採集」は、遂に具體化し、去る八月五日夜、同リ高等科一年木下廣雄君と、日笠喬光君と旅行の好きな学園國語教師小山忠雄氏もこれに加はり東北地方へむけ出發した。最初に訪れたのは学園農藝村セツトルメント所在地、田澤湖を少し去る生保内村、そこにいてはセツトルメントの關係家族佐藤衛門氏の家を尋ねて、紫の在所を開いたが、わからなかつた。土地の人達も、昔あつたと言ふこと、今でもどこかにあると言ふことはわかつてゐても、それ以上のことは少しもわからない、結局、木下君と

ちがさがしださねばならなかつた。その日は田澤湖畔に行つたのに終つた。夜は、セツトルメントに泊る。翌七日は村の校長先生の案内で仙元時の近くに當らずに過ぎた。木下君は次の様な歌をよんだ。

むらさきをたづねさがせど姿なくありし昔を聲できくのみ  
八日もその様に終つた。  
以下は紫の旅日記より

**紫草発見の日**  
九日佐藤右衛門氏と、むらさき草を見たことがあるといふ一人の百姓と一緒に玉川を越えて山居といふ山に行き、五人は山を八方から攻める様に草をわけて探して行くと、遂に八本見つ

かつた。其の時は國寶を手にした様な感じがした。それはセツトルメントに移植した。今後発見次第、この場に移すよう校長先生、土地の人に頼んだ。當夜は佐藤右衛門氏の家泊つた。見つけた紫は何の備徹もない雑草と見まごうやな草であつた。白い花が小さくついた高さ二尺足らずのものであつた。この草の根がそのやうな威力を持つとは信じられない程であつた。

十日當地に一年に八回位しか

ないと言ふ日本晴、佐藤右衛門氏に赤飯で門出を祝はれて當地を發ち、五里の山道仙岩峠を越え又馬車トロ等にゆられて小岩井農場に致つた。

十一日は一日農場見學、夕方盛岡に着、盛岡の南部紫染料、警州堂を訪れ、主人と語つた。午後奥中山に行き、むらさき二十本発見した。

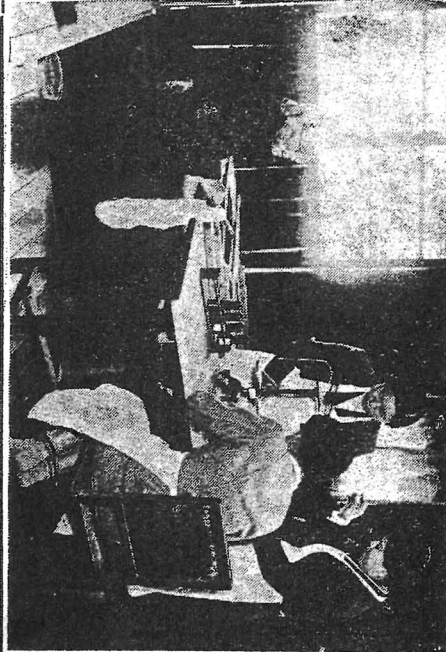
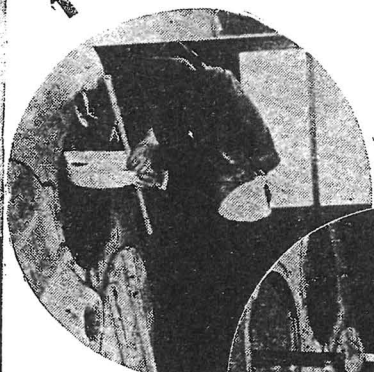
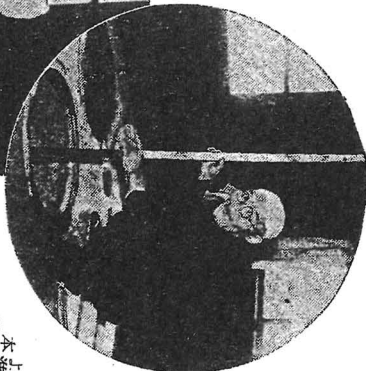
一行は明る十三日を一日、平泉の金色堂、松島等の見學に費し、十四日歸京した。(後略)

【資料6】 学園新聞編集部 (1941) 「最初の藍に成功」『学園新聞』第132号  
昭和16年3月31日 自由学園出版局

號二十三第 可認物郵便種三第 聞新園學 行發回一月毎 行發日一十三月三年六十和昭 (2)

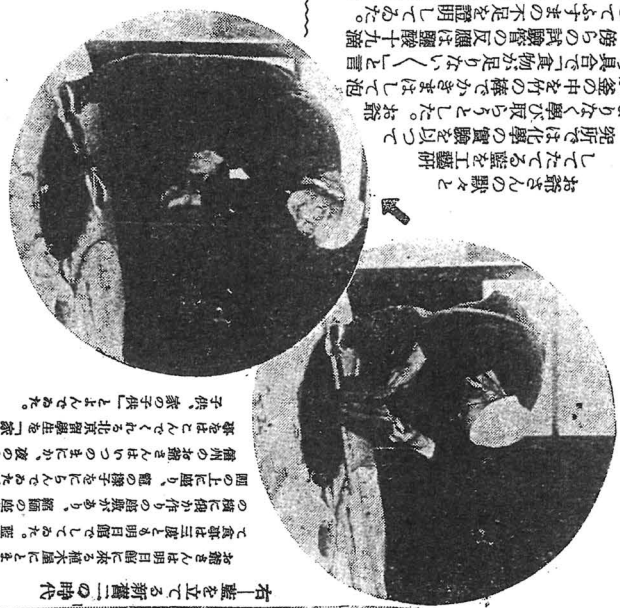
### 最初の藍に成功

工農研究所では、昨年より着手した植物染料の研究もいよいよ進んだので三月下旬、日本古来の植物染料の神祕、藍をたてることとなり、信州千曲川のほとりから五十年間藍をたててゐた松尾朝太郎お爺さんを招いた。



右半藍を立てる新機時代の

お爺さんは明日朝に來樟木庵にとつて藍草三束も明日藍じてゐた。藍題の機に外作りの藍草も、藍題の準備の機の上廻り、藍の機子等とらんで来た。備前のお爺さんはつゝまたか、夜の風事までんでくむる松尾朝太郎を「家の子、家の子供」として上げて来た。



お爺さんの歌々としてたてる藍を工農研究所では化学の實驗を以つてあまりなく風が取りとれた。お爺さんの釜の中を竹の棒をかまはして泡の立ち具合で風物が足りなく、「と言ふ時傍らの試験管の反應は酸十九滴を要してふすまの不足を證明してゐた。第八目の夜「今夜眞夜中頃、藍をたてる行程のうち一番むづかしいことが起るとお爺さんは言つた。工農研究所の所員數者は徹夜でその機間をまもる。釜をのぞいたお爺さんの説明に一語もいらすまいとさきいづつた。昨夜十時半時鐘が来て、一升ほどの石灰とふすまを入れたお爺さんはこの藍液も九分九厘だちやした」といつてはじめた。お爺さんの藍を染めてから半昨年十一月に藍の機を築いてから半歳はじめて藍をたてた工農研究所でお爺さん將に相えさうになつてゐる藍の技術をお爺さんに教へて貰ふべからせむ。

藍の草は今、わづかに四國の阿波にこのころあるばかりとなつた。またその技術も、化学染料におざされて忘れられ捨てられてゆく。隣に藍の草を栽培し、それによつて心へ藍を出してゆかんとする計畫の將來に幾多の困難と共に多くの期待がかけられる。

物5: 100-110.

- 2) 原田節子・浅羽不二子・石山英子・加藤雅子・斉藤雅子・戸塚和子 (1958) 那須におけるブユの分布, すみ分けの調査成績 衛生動物9: 64-65.
- 3) 原田節子・鶴田多喜子・寺沢浄江・藤戸信子・濱口良子・福島祐子・藤戸裕子 (1959) 薬剤によるブユ駆除後のポプレーション回復状況についての調査成績. 生活と環境4: 30-33.
- 4) 伊藤由紀子・原田節子・鈴木猛 (1962) 8年間にわたるブユ駆除成績とブユ幼虫の殺虫剤抵抗性 衛生動物13: 274-278.

#### b. 東久留米市史料

1) と2) は絶版である。植物については、2) の内容を受け継いだ新屋茂木監修 (1989) 『東久留米の野草—野外観察ガイドブッカー』が東久留米市教育委員会から刊行された。ガイドブックは、東久留米市役所等で購入できる。

- 1) 吉良幸世 (1977) 『東久留米の野鳥—小さな仲間たち—』東久留米市教育委員会
- 2) 藤田朋子 (1978) 『東久留米の野草』東久留米市史料 第5号 東久留米市教育委員会
- 3) 吉良幸世 (1994) 『東久留米の野鳥—野外観察ガイドブッカー』東久留米市教育委員会

#### c. 自然環境と土壌無脊椎動物相についての研究、およびその発展

自由学園内の「大芝生」の芝枯れの兆しをきっかけに土壌生態系についての研究が始められ、東京都立大学の北沢右三博士にご指導いただいた。1) ~5) は、環境庁の委託研究 (立教大学) の一部である。この調査研究参加の経験と考察が、自由学園内の自然環境保全の中に生かされてきた。

なお、国立科学博物館附属自然教育園では、園内全体が地図に位置付けられ、従来から継続的に地図上に個々の樹木の状況が記録されてきている。自由学園構内についても、自然教育園の萩原信介国立科学博物館名誉研究員 (現在) の指導で、樹木の地図への位置づけができる仕組みを取り入れ、林床植物についても森林環境と合わせて個々の樹木の履歴を考慮した自然環境保全に取り組むこととなった。自由学園構内で1956年以来、10年おきに行われている樹木調査も2006年度以来この仕組みで行われ、個々の樹木が世界測地系に位置づけされ、さらに林床についても樹木との位置関係から生育環境の履歴と将来についての考察が容易になってきている。

さらに東久留米市内で陸産等脚目の分布による自然環境評価と、二次林伐採後の萌芽調査が行われた。

- 1) 斎藤晋・寺田美奈子・藤田朋子 (1975) 大形土壌動物の現存量。「各種生態系における野生動物の現存量に関する研究報告書」(北沢右三編). pp 85-122. 立教大学, 東京.
- 2) 斎藤晋・寺田美奈子・藤田朋子 (1977) 武蔵村山市海道の二次林と明治神宮の森林における大形土壌動物の現存量。「各種生態系における野生動物の現存量に関する研究報告書」(北沢右三編). pp 65-80. 立教大学, 東京.
- 3) 斎藤晋・藤田朋子・寺田美奈子 (1978) 富士山梨ヶ原, 霧ヶ峰における大形土壌動物の現存量。「各種生態系における野生動物の現存量に関する研究報告書」(北沢右三編). pp 77-91. 立教大学, 東京.
- 4) 斎藤晋・寺田美奈子・藤田朋子・安部琢哉 (1979) 西表島のシイ林における大形土壌動物の現存量。「各種生態



系における野生動物の現存量に関する研究報告書」(北沢右三編). pp 85-122. 立教大学, 東京.

- 5) 斎藤晋・寺田美奈子・藤田朋子(1979) 大形土壌動物の現存量. 「各種生態系における野生動物の現存量に関する研究報告書」(北沢右三編). pp 123-149. 立教大学, 東京.
- 6) 藤田朋子・大塚ちかこ・宇野リベカ(1981) 自然教育園内の四林分で調査した大形無脊椎動物について. 「自然教育園報告」国立科学博物館. 12: 31-75.
- 7) 斎藤晋・寺田美奈子・藤田朋子(1982) 谷川岳のブナ林における大形土壌動物の密度と現存量. 群馬県立女子大紀要. 2: 59-78.
- 8) 自然誌樹木グループ(1997年度)(指導: 星住リベカ・松田こずえ)(1998) 保全地域の雑木林伐採後一年目の植生の変化(予報) 女子最高学部卒業勉強. 自由学園年報. 2: 232-237.
- 9) 寺田美奈子・星住リベカ・自由学園女子部高等部自然誌研究グループ(1988・1989・1990年度)(2001) 陸産等脚目の分布による自然評価—東京都東久留米市の場合—. 神田外語大学紀要. 13: 283-300.
- 10) 旧女子部自然誌樹木グループ(1993・1994・1995・1996年度)(指導: 星住リベカ・松田こずえ)(2011) 1996年度学園樹木調査報告. 自由学園年報. 11: 65-76.

#### d. 復刻新版

1) は、自由学園教師であった吉良幸世氏(1927-1997)の著作がまとめられている。南沢の自然については、1952年から書かれている。2) は、1937・1940年の初版に、1952年の前橋営林局による再版時に作成された文献集を併せ、この研究を始めた女子部13回生の提案と寄付によって刊行された現代仮名遣いによる復刻新版である。自由学園しのめ茶寮等で販売されている。

- 1) 吉良幸世著・鈴木康平編(2000)『自然はともだち—南沢博物誌—』自由学園出版局
- 2) 自由学園女子部自然科学グループ(2003)『自由学園学術叢書 第一 復刻新版 霜柱の研究・布の保温の研究』自由学園出版局

(注): 上記リストの文献については、当時の調査資料が掲載されており、その後の研究に引用されているものが多いが、主に専門家によって用いられている。ぜひ、地元の武蔵野東久留米の南沢自然誌資料として、地元の方々にも活用されることを願っている。非公開のものについては、自由学園図書館で、閲覧可能である。

本寄稿文をお読みになり、内容に関係のある文献、写真などをお持ちの方に、ご連絡いただければ幸甚に存じます。